

Philip K. Dick の *Do Androids Dream of Electric Sheep?* に見るポストヒューマニズム

主人公リック・デッカーとテクノロジーの関係性を考察して

毛利 優花

はじめに

フィリップ・K・ディックの *Do Androids Dream of Electric Sheep?* (『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』、1968 以下 *DAD*) は、長期化した戦争により、環境が汚染され、動物が絶滅に瀕している地球を舞台に、他の惑星での植民作業という過酷な労働から地球へと逃亡してくるアンドロイドと、地球で彼らを抹殺することを仕事にする一人の男を描いている。

人間とアンドロイド、生命体と機械といった近未来的な要素を扱ったいわゆる SF 作品である *DAD* は、現在では、2017 年に Coeckelbergh が *New Romantic Cyborgs* で論じたように、人間とロボット、あるいは生命体とマシンの“hybridity”を扱う文学作品の一つとして評価されている。ここではサイボーグが、“human-machine hybridity”とはどのようなものであるかを想像し、考える試みに使われているのだ、と Coeckelbergh は論じる(120)。*DAD* は、しばしば、人間とロボット、命あるものとマシン、という対立構造を軸に分析されるが、ここで hybridity という言葉を持ち込むことによって、ディックが *DAD* の中で人間とアンドロイド、本物の動物と電気動物の差異を故意に曖昧にしている部分を評価することができるだろう。

主人公の言動や思考から見えてくる人間中心的な物の見方や、動物への執着、そしてアンドロイドを含むマシンへの否定的な観念は、テクノロジーの発展に飲み込まれていく人間の不安を明確に表現している。彼らが高度に発展したテクノロジーと向き合うことは何を意味するのか。デッカーを中心とした思考の分析を通して、ポストヒューマンの可能性を含む人間とテクノロジーのあり方を考察していく。

一. デッカーの欲望とテクノロジー否定

主人公のリック・デッカーは、バウンティ・ハンターとして、地球に紛れ込んでいるアンドロイドを探して殺すという役目を持っている。彼は、アンドロイドを殺すともらえる多額の賞金で本物の動物を飼いたいと思っている。第三次世界大戦後、生き残った動物は高値で売買され、裕福な者しか飼うことは許されないため、多くの人は代わりに電気動物を世話しているが、デッカーもその一人であり、電気羊を飼っている。

自らの存在を動物に認知されたいというデッカーの欲求は、電気動物を飼うことでは満たされない部分だと考えることができるだろう。同じ様に、デッカーは、他者の存在の認知の無い点ではアンドロイドも電気羊と同じだと考えている。電気動物への憎悪と同時に、彼が仕事で殺さざるを得ないアンドロイドは、他者を思いやる気持ちのない存在として、殺しても良いものだとして認識される。

だが、発展してゆくテクノロジーは、アンドロイドにもさらなる能力を付与した。最新型のネクサス六型アンドロイドは “The Nexux-6 android types...surpassed several classes of human specials in terms of intelligence.” (*DAD* 23)と描写され、human specials (特殊者) という、放射能の影響を受けたことで通常より劣った知能を持つ人間よりも優れたものとなり、より進化を遂げたことが描かれる。彼はアンドロイドと電気動物を比較対象として並べ、他者との関わりを人間の特徴—すなわち人間性—であることを軸に、人間を最も高度な認識能力と情を合わせもつ生命体とみなし、ロボットは下位の存在と位置づける。デッカーは人間を中心と考え、テクノロジーを否定することで、目の前の現実を否定している。すなわち、電気動物やアンドロイドといった科学技術の発展によりもたらされた新しい形態の擬似的生命体の hybridity を受け入れられずにいる。

二. 人間中心主義と自然支配的思考

デッカーは、電気動物およびアンドロイドのあり方を否定し、科学技術が台頭した世の中の形式を受け入れられずにいる。この小説では、デッカーの本物の動物への憧れを描くことによって、デッカーの人間中心主義の根底にある経済中心的な考えが露わになる。彼が考える動物の価値は、彼らが生きていることだけでなく、大きなビジネスの一角をなしていること、そしてそのビジネスに自身が身を置いていることへの充足感にも繋がっている。こうして彼の人間中心主義的な本物の動物への憧れは、その根底に極めて非人間的な経済活動にもとづいた動機付けがなされていることが明らかになる。

デッカーが考える人間の主体性とは、他者への配慮や思いやりの有無とはまた違ったものであり、歪曲した人間のエゴが如実に表われたものである。本物の動物を飼ったことで鬱が治ると断言する妻のイーランドが、ここにも人間中心的な思考が垣間見える。この小説では動物が主体となって描かれることは極端に少なく、あらゆる動物の描写はデッカーを中心に人間からの視点によって描かれている。また、最新型アンドロイドのレイチェル・ローゼンに、‘Hell, as you said you’ve only got two years of life left, anyhow. And I’ve got fifty. I’ll live twenty-five times as long as you.’(DAD 158)と言う。アンドロイドが三、四年しか生きられないことに対し、デッカーは人間の平均寿命という事実をアンドロイドに突きつける。デッカーの非情さと人間優位の思考が見える箇所であり、他者の存在を配慮しない様はあたかも彼がアンドロイドの特徴を示しているかのようだ。

デッカーが本物の動物に大きな魅力を感じていた理由は、本物の動物の存在の尊さを認識していたからではない。そこに成り立つビジネス、自らが大金を支払うことのできる社会的地位にあることを肯定してくれる事実、そして自ら主体的な意志を持って動物を意のままに扱うことができるという人間中心主義的な優越感に駆られ、彼は動物を飼う決意をしたのである。彼にとって動物は一時的に欲求を満たしてくれる「道具」に過ぎない。

三. デッカーの変化とポストヒューマンの可能性

この小説の特徴は、人間とノンヒューマン、本物の動物と電気動物といった、二項対立構造で分析されるものが、融合されていたり区別が曖昧にされていたりといった *hybridity* にあることは「はじめに」で述べた通りであるが、ストーリーが終盤へと向かうにつれて、デッカーの思想にも変化が見られるようになる。賞金で購入した山羊をレイチェルに殺され、喪失感を覚えたデッカーは、荒野に赴き自死することを決意する。デッカーが荒野を最期に選んだのは、彼がこれまで固執してきた人間性（と彼が思っていた自己中心的思想）や動物を含むあらゆる生物への憧れをすべて手放そうとする意志の表われであるようにも見える。

デッカーは荒野にてヒキガエルを発見し、その生命力溢れる様子に感動する。しかし、そのヒキガエルは電気動物であることが明らかになる。彼は落胆するが、同時に、“The electric things have their lives, too. Partly as those lives are.”(DAD 191) と言う。電気動物を頑なに否定してきたデッカーが、電気動物を認めた瞬間であり、ここで彼はテクノロジーに溢れた世界の現実と向き合うようになる。彼は、人間本位の思考により、テクノロジーを拒否するばかりでなく、自然世界からも疎外され、生命の尊さを見出せずにいた。テクノロジーを介して自然世界と再び関係を持つことによって、自らが自然を構成する一員であることを自覚することに繋がり、デッカーにも、あらゆる形態の生き物やテクノロジーとの関係性を見直す動きが見られたと言えよう。

結論

本発表では、フィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』に描かれる、人間とテクノロジーの関係性およびポストヒューマンの可能性について考察した。主人公デッカーの動物観を中心に、自らの社会的地位のために動物に執着する姿勢や自然支配の欲求を分析し、電気動物とアンドロイドに見られる他者に配慮しない姿勢と彼の人間中心主義的な言動は複雑に絡み合っている点を指摘した上で、彼の自己満足に陥った思考に焦点を当てた。生命力溢れる電気動物との出会いが彼の自然との向き合い方を変化させ、同時にテクノロジーによって支配された社会における人間の立ち位置を気づかせるに至った。

デッカーは、常に自分が主体だと思って生きてきた人間である。しかし、テクノロジーの発展に伴う高い知能を持ったアンドロイドや、本物さながらの電気動物の台頭により、人間の存在意義は変化していく。労働や知能の面で人間の代わりとなりうるもの、本物と同様に世話が必要な電気動物の出現は、人間が必ずしも主体でいられない状況を作り出すことを意味する。デッカーの気付きは、テクノロジーと共存する現実世界と、それに順応していく人間のあり方を如実に表している。ディックの描いた世界は単なるディストピアではなく、人間がテクノロジーと共生する希望と不安に満ちた近未来的社会である。現代的な知見を含むこの小説は、人間本位の思考から抜け出せない人間の本质を表しながらも、我々が享受する昨今のテクノロジーの大小さまざまな影響を考える際に、手がかりになると考えることができるだろう。

引用文献

Coeckelbergh, Mark. *New Romantic Cyborgs: Romanticism, Information Technology, and the End of the Machine*. MIT Press, 2017.

Dick, Philip K. *Do Androids Dream of Electric Sheep?* Orion Books, 2012.

ディック, フィリップ・K. 『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』 浅倉久志訳, 早川書房, 2017年.